

社団法人 電子情報通信学会  
THE INSTITUTE OF ELECTRONICS,  
INFORMATION AND COMMUNICATION ENGINEERS

信学技報  
TECHNICAL REPORT OF IEICE  
ET96-42 (1996-07)

## Web を利用した遠隔講義システムでの端末間運動と教材同期表示

于冬 久我信一 三部靖夫

NTT データ通信 (株) マルチメディア技術センタ

〒 210 川崎市幸区堀川町 66-2 奥和川崎西口ビル 10F  
TEL: 044-548-4614 FAX: 044-548-4694 Email: uto@mm.rd.nttdata.jp

あらまし

我々は、WWW とそのブラウザを用いて教材情報の提示を行う遠隔講義システムの開発を行っている。本システムでは教師と生徒間の情報共有は端末間運動および教材同期表示機能によって実現、保証される。教師は HTML で書かれた教材を生徒に見せながら、音声を用いて教材の解説を行う。更に教師は黒板を利用する感覚でチョーク機能を使用し、教材に直接注釈を書き込むことも可能である。生徒はテキスト・チャットまたは音声によるコミュニケーション機能を用いて、随時教師に質問することができ、教師も同様な手段を用いて即座に質問に答えることができる。本稿では、端末間運動と教材同期表示機能を中心に本システムの特徴と実現方法について述べる。

キーワード 遠隔講義、WWW、端末間同期、マルチメディア通信、VOD

## Inter-terminal Operation and Contents Display Synchronization in a Web-based Distance Teaching System

Dong Yu, Shin-ichi Kuga, Yasuo Sambe

NTT Data Communications Systems Corporation

66-2 Horikawa-cho, Saiwai-ku, Kawasaki-shi, Kanagawa 210, Japan  
TEL: +81 44-548-4614 FAX: +81 44-548-4694 Email: uto@mm.rd.nttdata.jp

### Abstract

We're now developing a Web-based multimedia distance teaching system. Teacher and students gain access to courseware stored on the server through a Web browser and can share the same information by using the inter-terminal operation and contents display synchronization feature. During the lecture, teacher can use real-time audio to make explanation of the courseware and students can ask the teacher questions using either text chat or audio at any time. In this paper, we will mainly describe the realization of how students can share teacher's operation and the same text information displayed on teacher's terminal.

key words Distance Teaching, WWW, Inter-terminal Synchronization, Multimedia Communication, VOD

## 1 はじめに

従来、物理的に離れている複数の地点を結んで、遠隔講義を行うためのシステムとして、衛星放送とテレビ会議システムが多く用いられてきた。しかし、このようなシステムでは、情報提示は主にテレビ映像を利用して行なうため、解像度の限界により文字と図形情報は見えにくい。また、情報は教師から生徒まで一方的に伝達されるため、生徒と教師間における質疑応答は容易に行うことはできない。教材の細部を映したり、生徒の質問を受け付けたりするには、ズームやカメラ切り替えといった操作を頻繁に行わなければならないため、教師に大きな負担がかかり、講義の円滑な進行が困難である [1]。

本稿では現在我々の所で構想と開発を進めている、WWW を利用した遠隔地講義システムについて紹介する。本システムでは講義内容の情報提示に WWW とそのブラウザを用いて行う。教師と生徒間の情報共有は端末間連動および教材同期表示機能によって実現、保証される。教師は用意したハイパーテキスト形式の教材を生徒に見せながら、音声を用いて教材の解説を行う。更に教師は黒板を利用する感覚で、チョーク機能を使用して教材に直接注釈を書き込むことも可能である。生徒はテキストチャットまたは音声によるコミュニケーション機能を用いて、随時教師に質問することができ、教師も同様な手段を用いて即座に質問に答えることができる。上記のような各機能を備えた遠隔講義システムを利用することにより、従来教室内で行われている対面授業に近い、遠隔教育の環境が実現可能だと考えられる。

## 2 システムの概要

### 2.1 システムの特徴

本稿で紹介する試作システムは生徒による独学と教師による講義を両方サポートする。その主な特徴は以下になっている。

#### 独学モードと講義モードに共通する特徴:

1. 教材の表示と作成は WWW を利用して行っている。このことによりさまざまな HTML 文書作成支援ツールが利用できる上、インターネット上にあるさまざまな情報に簡単にアクセスできるようにする。

2. 教材の素材としてテキストや静止画のほかに、語学教育に欠かせないビデオ素材も効果的に活用することができる。ビデオデータはビデオサーバに蓄積されており、クライアントからのリクエストに応じてコンスタント・ビットレートでサーバからクライアントへ伝送される。映像品質は VHS レベルの MPEG1 から高画質の MPEG2 までサポートできる。
3. クライアントにおけるビデオ再生などの機能はヘルパーアプリケーションではなく、ブラウザのプラグインとして実現されているため、利用しやすいユーザ・インターフェースになっている。
4. 教師と生徒間におけるコミュニケーションの手段として、テキスト・チャットによる 1:N 通信機能とリアルタイム音声による 1:N 通信機能を実現している。これらの通信機能はできるだけ使いやすいようにデザインされており、仮想教室内において、教師と生徒との間で円滑なコミュニケーションが実現可能である。

図 1 は本システムのユーザ・インターフェースを示している。独学モードの詳細および上記機能の実現方法については、文献 [3] において詳しく紹介されている。



図 1: クライアント GUI インタフェース

#### 遠隔地講義モードの特徴:

1. 端末間連動と教材同期表示による情報共有  
本システムではカメラ映像を利用する代わりに教師と生徒ブラウザ間操作の連動によって教材情報の提示を行っている。従来のテレビ会議システムを利用した遠隔講義システムに比べて、

この方法では少ない労力でより多くの情報を教師と生徒間において共有できるようになる。将来的には、教師がさまざまなソフトウェアの操作方法を生徒に教えられるように、この機能を拡張する予定である。

2. 教材同期表示を保証する仕組みを備えている  
教材提示に WWW と汎用ブラウザを利用しているため、教師と各生徒は常に同じ HTML テキストを見ていることをなんらかの仕組みで保証しなければならない。本システムでは Lesson Manager を導入することでこの問題を解決している。Lesson Manager の詳細については 5 節で説明する。

- ### 3. 教師による生徒端末状態の把握

教師がハイパーテキスト教材上にあるリンクを選択した時、リンク先のテキスト内容がHTTPサーバから送られてきて、ブラウザに表示されるまでに要する時間は各端末において一定ではなく、さまざまな要因によってその時間にはばらつきが生じることが多い。講義をスームスに進行させるために、教師はどの生徒がどこまで教材をロードしたかといった情報を把握する必要がある。本システムではLesson Managerの機能の一つとして生徒端末における教材のロード進行状態をリアルタイムで教師に提供する機能を実装している。

- #### 4. チョーク機能

講義中に教師がマウスを用いて教材上に注釈などを書き込んだりするのに利用する機能である。

## 2.2 システムの構成

本システムは Campus Manager (CM)、Lesson Manager (LM)、WWW サーバ (httpd)、ビデオサーバ、教師端末、そして生徒端末といふ7つのコンポーネントから構成される (図2)。すべてのコンポーネントはネットワークによって接続されている。このうち、CM はユーザ情報と講義カリキュラムに関するデータベースを持ち、ユーザのログインとログオフ、LM の立ち上げおよび管理など、システム全体の運営管理を行う。LM は仮想教室上で行われる特定の講義の進行を管理することが主な役割であり、端末間運動と教材同期表示、生徒端末状態管理といった重要な機能は LM によって実現されている。

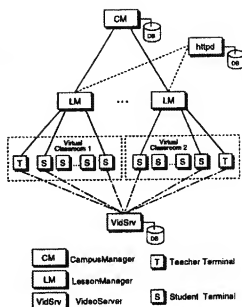


図 2: システム構成

### 2.3 本システムにおける遠隔調達のシナリオ

1. 各生徒は事前に受ける授業を登録しておく。
2. 教師がログインし、講義参加の受け付けを始める。
3. 登録済みで、かつ現在ログイン中の生徒に開講通知が送られる。
4. 通知を受けた生徒は一定時間内で講義参加の選択を行う。
5. 教師は講義を開始し、生徒端末を遠隔操作する。
6. 教師は教材を生徒に見せながら、音声で説明をする。
7. チョーク機能を使って、教材に注釈を書き込んだりする。
8. 生徒はテキストチャットまたは音声で質問する。
9. 自習時間では教師は遠隔操作を一時中止し、独学モードにする。
10. 自習時の生徒の進み具合などを教師はモニタリングできる。
11. 教師は講義を終了する。

以下の節では本システムの特徴である端末間連動と教材同期表示による教材提示と情報共有について

述べる。

### 3 端末間運動と教材同期表示

本システムでは、教師が仮想教室上で講義を行う際、教師の行った操作がリアルタイムで生徒端末において再現される端末間運動と教材同期表示機能を実現している。端末間運動は主に教師と生徒端末間におけるマウスポインタの移動、ボタンの押下、キー入力、およびメニュー選択といった操作の運動を意味する。一方、教材同期表示は教師があるHTML教材をロード・表示した場合、全ての生徒端末も同じ教材をロード・表示し、教師と生徒が常に同じ教材を共有できることを言う。教材同期表示の実現にURL(Uniform Resource Locator)に着目したURL運動方式がある[2]。この方式では、教師がロードした教材のURLはネットワークを通じて教師端末から生徒端末に伝送される。生徒端末は受けとったURLを用いてHTTPサーバにリクエストを送信し、教師と同じ教材をロードし画面に表示することで、教師端末との教材同期表示を実現している(図3)。この方式は実現は簡単ではあるが、ブラウザに変更を加えずにURLを取り出すことは一般的に困難であり、従って汎用のブラウザを利用することはできない。また、この方式ではマウスの操作、キー入力などの運動は別の方法で実現しなければならない。

本システムでは、URLの代わりにウィンドウズのイベントを利用するイベント運動方式を用いて端末間運動および教材同期表示の実現を試みる。

#### 3.1 イベントによる端末間運動の実現

イベントによる端末間運動は以下のように実現される。

1. 教師端末で発生したウィンドウズ・イベントがブラウザに伝わる前にそのコピーを一部入手する。
2. 入手したイベント情報をネットワークを通じて各生徒端末に伝送する。
3. 生徒端末はイベントを受け取り、そのイベントがあったも自分の端末で発生したものかのように再生する。

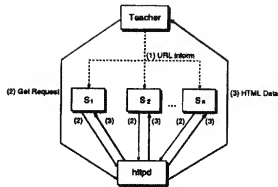


図3: URLによる端末間教材同期表示

イベントの入手と再生はWindowsのHookプロシージャを利用して行う。教師端末で発生したキー入力やマウスイベントはJournal Record Hookプロシージャによって採取され、生徒端末においてJournal Playback Hookプロシージャによって再生される(図4)。

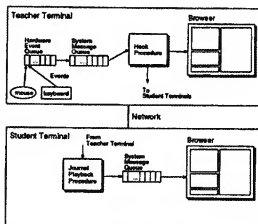


図4: イベントによる端末間操作運動の実現

イベントによる端末間運動では、教師と生徒端末間におけるマウスポインタの移動、ボタンクリック、キー入力、メニュー操作がすべて運動することになるため、教師と生徒端末が同一環境であることさえ保証されれば、端末間における教材同期表示も同時に実現されることになる。ここでいう同一環境とは以下に示す条件を満たす環境のことを意味す

る。

1. 同じ OS である。(本システムでは Windows95 を使用している。)
2. 同じディスプレイ解像度 (1024x768、1280x1024) である。
3. 同じブラウザを使用し、フォントなどの初期設定が同じである。
4. ブラウザのディスプレイ上における位置とサイズが同じである。

本システムでは、教師端末から生徒端末へのイベント伝送は次節で述べる Lesson Manager(LM)を経由して行うようにしている。イベントは教師端末から TCP(Transmission Control Protocol)を用いて LM に伝送され、LM より UDP(User Datagram Protocol)を用いて multicast または unicast で各生徒端末まで中継される。このことにより、LM におけるイベント伝送の最適化が図りやすくなる。

### 3.2 イベント連動方式の利点

イベントによる端末間連動には以下のような利点がある。

1. 教師と生徒端末間の高度な連動が可能である。
2. 端末間教材同期表示が実現できる。
3. 汎用性、拡張性に優れている。
4. 講義と演習モードを瞬時に切り替えることができる。
5. アプリケーションの共有を用いた共同作業環境が実現しやすい。

### 3.3 イベント連動方式の問題点

イベント連動には上記の利点がある一方で、以下に示す問題点もある。

1. 各端末が同一環境である必要がある。
2. 教材同期表示が保証できない。汎用のブラウザを使用しているため、ブラウザがどの URL をロード、表示しているかを知ることは困難である。したがって、すべてのブラウザが正しい教材をロードしていることを確認する手立てはない。何らかの原因で一旦同期が外れれば、それを検知し、回復させることはできない。

3. 教師は生徒端末における HTML 文書のロード進行状況を把握できない。すべての端末が同じ HTML 文書をロードし終わるまでにかかる時間は同じではない。特に高速 LAN と低速回線接続が混在するような環境ではロード時間に大きなばらつきが生じる。遠隔講義をスムーズに行うには、教師が各生徒端末における教材ロード進行状況を把握できる必要がある。しかし、上記同様の理由により汎用ブラウザを使用している場合、生徒端末の進行状況を把握することはできない。

本システムでは Lesson Manager を導入することによって、上記 2 と 3. の問題解決を図った。

## 4 Lesson Manager の導入とその役割

WWW 情報サービスシステムでは、クライアントとサーバ間は HTTP という Request と Response から成る簡単なメッセージ指向プロトコルを用いて、情報のやり取りを行うようになっている [4]。クライアントはサーバとのコネクションを設立し、サーバから入手したい情報の URL を HTTP Request の形でサーバに送信する。Request を受け取ったサーバは要求された情報をディスクから読み取り、HTTP Response の形でクライアントに伝送し、クライアントとのコネクションを切断する。WWW におけるすべてのやり取りがこの形で行われることから、HTTP レイヤにおけるクライアントとサーバ間のやり取りをチェックすることによって、クライアントが現在どんな情報をロードし、どこまでロードし終わったかを知ることができる。

本システムでは、端末とサーバ間に Lesson Manager(以下略して LM と呼ぶ)を設置し、遠隔講義時における端末と HTTP サーバとのやり取りを全て LM 経由で行なわせるようにしている。LM は PROXY-HTTP 機能をサポートし、端末からのリクエストとそれに対するサーバからの返事(Response)を中継することができる。今日の WWW ブラウザはほぼ全て PROXY 機能をサポートしているため、ブラウザを変更する必要はない。

LM における PROXY 機能はクライアントのリクエストをサーバに中継する意味では通常の PROXY-HTTP サーバと似ているが、遠隔講義という目的に合うように最適化されている。たとえば、LM は教

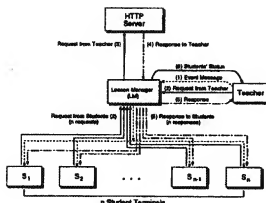


図 5: LM の仕組みと役割

師端末と複数の生徒端末からほぼ同時に到着するリクエストの中から教師のリクエストのみをサーバに送信する。生徒端末からのリクエストはLMで止められ、HTTPサーバに中継されることはない。端末とLMの間では隣接に参加している端末の数だけのリクエストと返事が同時に行き来するが、LMとHTTPサーバの間では常に一つのリクエストと返事しか発生しない(図5)。

LMを利用することによって、イベント運動における諸問題を解決することができるほか、全ての端末が教材をロードし終るまで要する端末間同期達成遅延時間の短縮、LM複数設置による負荷分散とサポートユーザ数の増加、学習履歴の保存と活用といった効果が期待できる。

#### 4.1 LM による端末間教材同期表示の保証

全ての端末からのリクエストがLMに送られるため、LMにおいて各生徒端末からのリクエストを教師端末のそれと比較することによって生徒端末が教師端末と同じ教材をロード・表示しているかをチェックすることができる。生徒端末よりHTTPリクエストがなかったり、または教師端末と異なるリクエストが映出された場合、LMから正しいリクエストをその端末に通知し、教材を再度ロードさせることにより、教師と生徒端末間における教材同期表示を保証することができる。

#### 4.2 LMによる生徒端末状態表示機能の実現

HTTPサーバからの返事は全てLM経由で各端末に送信されるため、LMにおいて各端末の教材ロード状況を把握することができる。生徒端末の状態をLMよりリアルタイムで教師端末に送信して表示すれば、教師による生徒端末の進捗状況の把握が容易で、遠隔授業のスムーズな進行が可能になる。

4.1と4.2は具体的に以下のように実現されている。なお、一つの講義で複数のLMを使用した場合、二つ目以降のLMをSecondary LMと呼ぶ。これに対し、教師端末のリクエストを直接受け付けるLMをPrimary LMと言う。

1. 各 LM は教師および生徒端末から HTTP リクエストを受けとる。(LM が複数存在する場合、教師端末のリクエストは Primary LM 経由で Secondary LM にも送られる)
2. キャッシュを調べる。キャッシュがヒットしなければ、教師端末からのリクエストを HTTP サーバに中継する。
3. 管理下の全ての端末から HTTP リクエストを受けかかどうかをチェックする。リクエストを出していない端末があれば、同じリクエストを出しているその端末に通知する。
4. 各端末からのリクエストの内容を教師端末からのリクエストと比較する。教師端末と異なるリクエストを出している端末が存在すれば、正しいリクエストを出すようにその端末に通知する。
5. HTTP サーバから返事 (Response) を受けとる (キャッシュがヒットした場合、キャッシュから返事を受けとる)。
6. 各端末に HTTP サーバの返事を伝送する。
7. Secondary LM 管理下の全ての生徒端末のロード終了情報が Secondary LM より Primary LM に送られる。
8. 全ての生徒端末がロードを終了したことを Primary LM より教師端末に通知される。
9. キャッシュを行なう。
10. ファイルログを保存する。

#### 4.3 LMによる輸送間同期達成遅延時間の短縮

インターネット上にあるさまざまな情報を利用するために、教師の作成する教材にインターネット

上にあるサーバに対する参照が含まれることがある。LMを採用しない場合、全ての端末から同じリクエストがインターネット上にあるHTTPサーバに送信され、同じ返事がインターネット上のHTTPサーバから各端末に返送される。校内LANとInternetとの接続は通常低速回線によって接続されていることから、この場合大きなネットワーク遅延が発生し、全ての端末が教材をロードしおわるまでにかかる同期達成遅延時間が大幅に増大する恐れがある。一方、LMを利用する場合、端末とLMの間は通常高速ネットワークによって接続されているため、低速回線を通るトラフィックをLMなしの場合の $1/n$ ( $n$ は授業参加中の端末の台数)まで削減することができ、同期達成までの遅延時間を大幅に改善することができる。

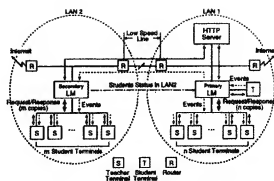


図6: LM複数設置によるNW負荷分散

#### 4.4 LM複数設置によるNW負荷分散

物理的に離れている場所の間のLAN間接続はダイヤルアップまたはデジタル専用線によるものが殆どである。通常のLANに比べてLAN間接続の方がバンド幅が細く、ネットワークのボトルネックになりやすい。図6のLAN1とLAN2にまたがって講義を行いたい時、両方のLANにLMを設置することによって、低速回線を通るトラフィックをSecondary LMなしの場合の $1/m$ まで削減することが可能である。

#### 4.5 LM複数設置によるサポートユーザ数の増加

HTTPサーバに同時にアクセスできるクライアントの数には上限がある。LMを経由せず、全てのリクエストが直接にHTTPサーバに送信された場合、サーバの同時アクセス数の上限を超えたリクエストはエラーになってしまう。特に人気のある外部サーバに対するアクセスにおいてはこのような問題が起こりやすい。

LMを利用すれば、一つのリクエストしかサーバに送信されないため、このような問題の起こる確率はかなり低くなる。更に複数のLMを設置することにより、授業に参加できる生徒の数を容易に増やすことができる。

#### 4.6 LMによる学習履歴の保存と利用

生徒アクセスログは知的CAIを実現する上で欠かせない情報である。従来のシステムでは外部サーバに対するアクセスログの採取が困難であったが、本システムではLMを利用することによって、生徒の全てのアクセス情報を利用しやすい形で収集、利用することが可能になる。

#### 5 おわりに

本稿ではわれわれが開発を進めている、Webを利用した遠隔講義システムについて、教師と生徒間の情報共有を実現する端末間運動と教材同期表示の機能とその実現方法を中心に述べた。本稿で提案する遠隔講義システムの特徴をまとめると以下のようになる。

- (1) Webをベースにしているため、Internet上にある豊富な素材をそのまま有効利用することができる。
- (2) 端末間教材の同期表示が保証され、かつ教師による生徒端末の教材ロード進行状況を把握できることから、遠隔講義のスムーズな進行が可能になる。
- (3) 教師と生徒端末間の運動の度が高く、拡張性と汎用性に優れている。
- (4) 負荷分散によるネットワーク資源の有効利用が可能であり、教材表示の同期達成までの遅延時間を低く抑えることができる。

- (5) システムはスケーラブルであり、LMの数を増やすことによって大人数の講義が可能である。

今後は1:Nリアルタイム映像の実現、オンラインオーサリングの追加など、機能強化を図りながら、本システムを実際の教育現場で使用し、そこから得た知見を本システムに反映していく予定である。

## 参考文献

- [1] 竹本宜弘, 田村武志, 高田伸彦: “分散型教育における講師操作環境の構築とその検証”, 情報処理, Vol.36, No.9, pp.2215-2227 (1995)
- [2] 三浦教史, 磯西徹明, 辻順一郎: “WWWを利用した教育支援システムの試作と評価”, 情報処理メディア通信と分散処理研究会 (1995.11.30)
- [3] 久我信一, 千冬, 三郎端夫: “Webをベースにしたマルチメディア遠隔教育システム”, 信学技報 教育工学研究会 (1996.7.13)
- [4] T. Berners-Lee, R. Fielding, H. Frystyk: “Hypertext Transfer Protocol HTTP/1.0”, Internet Draft, February 1996 (Expires August 19, 1996) (<http://www.w3.org/pub/WWW/Protocols/HTTP/1.0/spec.html>)
- [5] Ari Luotonen, Kevin Altis: “World-Wide Web Proxies”, April 1994 (<http://www.city.net/cnx/kevin.altis/papers/Proxies/>)
- [6] W. Richard Stevens: “TCP/IP Illustrated, Volume 1”, Addison-Wesley, 1994
- [7] W. Richard Stevens: “TCP/IP Illustrated, Volume 3”, Addison-Wesley, 1996
- [8] Bob Quinn, Dave Shute: “Windows Sockets Network Programming”, Addison-Wesley, 1996
- [9] Nancy J. Yeager, Robert E. McGrath: “Web Server Technology”, Morgan Kaufmann, 1996